新長崎学研究センター紀要　第３号（2023年）
長崎外国語大学

【講演録】

「記憶」との「出遭い」
―『変容する記憶と追悼』編集過程と個人の研究来歴から―

西　村　　　明

“Encountering” with the “Memories”:
From the editorial process of *Changing Memories and Mourning* and the personal research history

NISHIMURA Akira

本稿は、2022（令和４）年９月16日に開催した第１回新長崎学研究センター研究集会にて講師を務めていただいた西村明氏（東京大学大学院准教授）の発表内容を掲載したものです。

《講師略歴》
西村 明：東京大学大学院人文社会系研究科・文学部准教授。専門は宗教学・文化資源学。長崎県雲仙市生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻単位取得退学。博士（文学）。単著に『戦後日本と戦争死者慰霊―シズメとフルイのダイナミズム』（有志舍、2006年）、共編著に『慰霊の系譜―死者を記憶する共同体』（森話社、2013年）、『近代日本宗教史』全６巻（春秋社、2020～21年）、『シリーズ戦争と社会』全５巻（岩波書店、2021～22年）など。

キーワード：継承、第三者の関与、架橋

はじめに

ご紹介、どうもありがとうございました。こういう非常に貴重な機会をちょうだいしまして、あらためてお礼申し上げます。ただいまご紹介いただいたとおりなのですが、先ほどの生田先生のお話に出てきた災害や事故といったこととの絡みで少し補足をしますと、私が高校２年生のときに雲仙普賢岳の噴火が始まりまして、３年生の時に火砕流の災害がありました。長崎県内ですので地理的なことはご存じかと思いますが、うちの地元の旧国見町は島原半島の北部で直接被害はなかったんですが、高校に

通うのが大変でした。そういう経験を言語化したいということもあって、大学に入って宗教学を専攻しました。博士課程に入ってから、やはり長崎の原爆の問題についても考えたいと思いまして、慰霊追悼の研究を宗教学からのアプローチで長らくやってきました。

今回は「記憶」との「出遭い」というテーマでお話しさせていただきたいと思います。

出遭いという字、これは通常書く「出会い」と違って、遭遇の遭の字を当ててみました。後半で特にお話ししたいポイントになってきますけども、継承の問題を考える上で、少し変化球になると思いますが、いわゆる体験者、当事者の持っておられる生々しい記憶をそのままの形でバトンタッチするということが通常考えられるかと思いますが、それだけではないんではないかということについて、これまで研究した中から少し絞り出して、考えてみたいと思いました。

１．研究の来歴

まず初めに、今回、姫野先生からお話をいただきまして、現状のウクライナ侵攻の国際政治の不安の状況の中で、改めて長崎における被爆の体験をどう継承するか、戦争体験、被爆体験をどう継承するかという問題で、今、こちらのセンターでの取り組みをなさっているということをお伺いしました。11月に最初にご説明があったとおりシンポジウム、公開講座を開かれるということで、そうしたことからちょうど今年、最初にご紹介いただいた『シリーズ戦争と社会』の論文集を編集し、出版したというタイミングでしたので今回のご依頼をいただいたのかなと思います。

どういうお話をすればいいかなということを考え、この論集のテーマ設定になる過程を少し、その時の私の問題意識ということをご紹介しながら、私自身、特に先ほどの長崎の原爆慰霊の研究の後、特に鹿児島大学に赴任した2004年以降に博論の延長で考えてきたことをお話しします。この継承の問題がダイレクトに結び付くのではないかと思います。繰り返しになりますが、記憶と出遭うということ、これが80年近くたった現代の我々にとって、重要なポイントではないかと考えます。

博士論文を本にしたものを2005年に出版しました。タイトルは『戦後日本と戦争死者慰霊』で、サブタイトルを『シズメとフルイのダイナミズム』としています。慰霊の問題、言い換えると生きてるわれわれ生者にとって死者とはどういう存在なのかということ。これを宗教学の視点から、新里先生のシャーマニズム研究とも関心が重なる部分もありますが、死者の霊を慰めるということは、実際にその現場でお話を伺ってみると、それは慰霊追悼の片方の面でしかないということに気付きました。

一見、生きている側が主体で、死者を慰めているというふうに見えるけれども、むしろその反対側では死者の側から生者に対して働きかけがある。これは死者の魂が存

在するかどうかという次元だけではなくて、生きてる人間が死者がなぜ死ななきゃいけなかったのかという問いを受け取る。場合によっては､未練を残して亡くなるとか、あるいはその死に至らざるを得なかった原因であったりとか、そうしたことを未来に向けての課題として、ある種、引き受けることが慰霊を通して起こります。これはバトンタッチという言い方もできると思うんですが、そういう事態に対してフルイという概念を新たに設けました。要は生きている側の魂が奮い立たされるということですね。未来に向かってある種歴史的な主体として社会に参入する、歴史に参入する、そういう部分があるということでこのサブタイトルを付けました。

戦争死者という言い方は一般には用いられませんが、戦死者、戦没者というと戦闘員の死だけしか示さないのに対して、空襲や原爆の犠牲者も含めて、あるいは戦争に巻き込まれた民間人も死者に入れてということで包括的な概念として設定しました。英語で言えば、戦火に斃れたfallen soldiersだけではなくて、より全般的な戦争による死者を意味するthe war deadに対応します。戦争死者という単語を最初に博士論文で使った当初はあまりこなれていないと自分でも考えていましたが、最近ではこの表現を論文等で使われる研究者も増えてきました。戦争だけではなく、自然災害であったり事故であったり、そうした慰霊の問題、とりわけ『慰霊の系譜』という論文集は、2013年に出していますが、3.11の東日本大震災も受けつつ、さまざまな研究者たちと論文集を編集してきました。

最近は戦争社会学研究会に出入りをし、社会学や歴史学の研究者が多くを占める中で、宗教学というマイナーな学問分野の研究者として、むしろニッチなところを攻めていこうと、宗教からみる戦争という特集を組んだり（『戦争社会学研究』第３巻)、あるいは、これも社会学の人たちと一緒にやっていた研究会なんですけども、兵士の「生と死」を取り巻く社会ということで、特集を組みました（『理論と動態』14号)。従来、戦争体験という問題は20世紀的な問題として捉えられることが多かったところを、もう少し思想史的にさかのぼって考えていくと、H＝G・ガダマーが指摘するように体験ということ自体が近代になって注目を浴びていくというプロセスが浮かび上がります。宗教体験あるいは神秘体験についての研究の蓄積が宗教学の中にあります｡戦争体験の語りでは体験した人にしか分からないという表現がよく出てきますが、宗教体験でも同様の語りが見られます。体験した人にしか分からない。例えば、釈迦が悟りを開いて、その悟りの内容というのは容易に言語化できないと。しかし、梵天勧請というエピソードがありますが､その教えは大事だから他の人にも伝えてほしい。そこから宗教としての仏教がスタートしていく。そうしたある意味、人々の体験、これは宗教的な体験であったり歴史的に過酷な体験であったり、そうしたものが共有されていくということ。それは宗教の次元と歴史的な次元の比較をしながら、人文学的

に研究できるのではないかということで、少しそれを試みているところです。

２．『変容する記憶と追悼』の編集

少々自己紹介が長くなりましたが、これらの研究の他に、近代の宗教史について論集を編集したり、今回、直接的には『シリーズ　戦争と社会』という先程の戦争社会学研究会の仲間たちと編集をした論文集を、大体2017年ぐらいから企画をスタートさせて、ようやく今年になって全５巻のシリーズが完成しました。

スライドに掲げた新聞記事はこの研究会を中心的に引っ張ってきた早稲田大学の野上元さんが、このシリーズのコンセプトについて説明しているものです。いわゆる第２次大戦、あるいは太平洋戦争、日本人にとってあの戦争というふうに捉えられるような20世紀的な戦争のイメージで言えば、今、目の前で起こっている事態は、これは本当に戦争と言っていいのかと言えるほどの、さまざまな変化があります。テクノロジーの問題であるとか、軍隊についてもいわゆる国民軍ではなくて、民間の警備保障会社・軍事会社がむしろ前線で戦争に加わってるというような状況があります。われわれの認識もそういう形でアップデートしつつ、あの戦争を捉え返すことで、継承ということについても、現代的なコンテクストでどう継承して、どうリアリティーをもって考えていくかということにつながるのではないかと思います。

そういった視点から、この『変容する記憶と追悼』という論文集のタイトルを挙げました。変容という語を頭に持ってくると、記憶が薄れていってるということを前提にしているということで、ネガティブな印象も与えかねないタイトルかと思います。しかし、今、言ったように大きく戦争そのものが変わってくる。冷戦やポスト冷戦の状況であったり、21世紀のさまざまな変化の中で戦争を考えてみると、例えば、ロシアのウクライナ侵攻っていうのは意外過ぎるほど20世紀的な展開でもありました。この論集を出版する過程でそれが起こってきて、われわれ編者の想定外にまた注目を集めることになるということもあるんですけども、いずれにしても同時進行の事態の中で私たちはどう考えればいいのか。あるいは今後、どうしていけばいいのかということを常に考えながら、編者や執筆者の皆さんとやりとりをしながら、何とか出版にこぎ着けたというところです。

内容については、既にご覧いただいている方もいらっしゃるかと思いますが、私のほうで総説という形で「戦争を記憶し、戦争死者を追悼する社会とそのゆくえ」を書き、これは高校生にも読めるようにという無理難題を自らに課しましたので、ある程度丁寧に重要な枠組みを押さえつつ、今回、寄稿していただいた皆さんと研究の方向性を整理するのが私のお役目でした。

１部、２部、３部に分けまして、人にフォーカスを当て、慰霊追悼あるいは記憶をす

る人々にフォーカスを当てる第１部。第２部は物や場所、これはこちらの研究集会のテーマである記録ということにもつながっていくことになると思いますが、記憶の支点という言葉を出しました。第３部として実践。これは信仰者という人、信仰を支える経典・聖典や教会・聖地といった物と場所、それに信仰実践という宗教学的な着眼点が整理に好都合であったという部分もあるんですが、実際に戦争をめぐる人々の営みを考える上でも、人にフォーカスを当て、場所や物から捉え返していって、現在進行形で、あるいは技術的広範の社会の中でどういう記憶の営み、あるいは記念の営みが行われてきたのかということが重要な論点となります。

とりわけ、戦後社会というのは冷戦構造の中で展開して、日本国内では戦争がない状況であったわけですけども、しかしこの裏側では世界のどこかで、例えば朝鮮戦争やベトナム戦争の戦禍もありつつ、戦闘という形ではない戦争が継続して、国内でもそうした戦争と関わる最前線として、例えば沖縄のような場所がありつづけました。そういったことを常に意識しながら執筆をしていただくということを執筆者会議などで共有しながら進めました。

編集委員をご一緒した蘭信三さんが、今回、ちょうど自分も九州に来ているのでこの研究会に行きたいとおっしゃって、どういう経緯で関心を持たれたのか、こちらの外大の建学の精神について話題に出されて、「西村さんが話をするのはぴったりだね」と連絡をいただいたりしていたところです。その蘭さんがやはり昨年、『なぜ戦争体験を継承するのか―ポスト体験時代の歴史実践』という論集を、われわれの戦争社会研究会のジャーナルを出していただいているみずき書林から出版されました（小倉康嗣・今野日出晴との共編）。蘭さんはオーラルヒストリーを中心に引き揚げ者の体験を長らく研究されていますが、この歴史実践という言葉については最近、私も関心を持っている研究アプローチなんですが、歴史を記述するということであったり、歴史と関わりながら現代を生きるという姿勢を打ち出して、パブリックヒストリーなどの試みとも密接に関わるものです。

あと、若手の映画作家の大川史織が、マーシャル諸島で亡くなった兵士のいわゆる戦争遺児の方が旧戦地を訪問するのに同行されて、『タリナイ』というドキュメンタリーを撮られています。タリナイというのは日本語に由来するマーシャル語で「戦争」を意味します（物資不足の状況を表すものと考えられる）。大川さんは、芸術表現を使ってそうした記憶の問題、あるいは今なぜ戦争を描くのか、記録するのかということについてさまざまな表現者との対話から『なぜ戦争をえがくのか―戦争を知らない表現者たちの歴史実践』という本を、先ほどの蘭さんたちの論集の姉妹編のような感じで編まれています。大川さんには今回の変容する記憶と追悼の論集にコラムを書いていただきました。

３．第三者の記憶への関与

ここからは、私自身が、特に鹿児島大にいた時の研究の延長で今回の論集があるということのお話を少し紹介したいと思います。科研費基盤Ｂをいただきまして、あと、私が所属する「宗教と社会」学会の学会プロジェクトに申請して、何に使ってもよいスタートアップ資金を２万円いただいて、非常に活発に研究を進めることができました。戦争死者慰霊の関与と継承に関する国際比較研究というテーマで３年間のプロジェクトを実施しました（プロジェクトのブログ：http://kannyotokeisyou.cocolog-nifty.com/blog/）。

二つ、サブテーマを設けまして、一つは世代間継承の問題の歴史的な展開について。もう一つは、世代間継承の問題も含みながら、戦争体験の当事者や遺族など直接的な関係者ではない第三者（サードパーティー）が、慰霊追悼に関わることについて。当事者の高齢化であったり、遺族会や戦友会が解散する中で、別の人たちが主体的に慰霊を行ってると。

例えば、先ほどマーシャルの話をしましたが、マーシャルの戦友会がもう解散の危機になって、そこに調査に入っていた若いアメリカ人研究者に継承の期待がかけられてるといったことも生じていました。これもある種の出遭いだと思います。あるいはミャンマー、ビルマ戦の戦友会の生存者が現地に行って遺骨収集をしたり、戦地でも慰霊をする際に、激戦地の子どもたちに奨学資金を与えて、日本に留学をさせているといったことがあります。そうした形での現地との関わりなども含めて、さまざまな慰霊を通した慰霊以外への展開が、草の根の国際交流のような形で、さまざまなことが起こっています。あるいは第三者の関与ということで言えば、最初はあくまで付き添いであったツアーコンダクターや旅行代理店が、同行者の高齢化で、むしろ主体的に慰霊を組織するということに変化してきていたりする。そうしたことを中心に見ようということで、この研究を立ち上げました。

この論集の中では、第３章の中山郁さんの研究は、サブタイトルだけ申し上げますと、「パプアニューギニアにおける戦地慰霊と旅行業者」、今お話ししたような内容を論じたものです。そうした点に一つ注目しながら、第１章のオーストラリア国立大学の田村恵子先生をはじめ、この科研プロジェクトを通して関わりを持った人たちに、何人も寄稿していただいています。

科研の経過報告的な位置付けで、３年目にシンポジウムを行いました。「戦争の記憶と継承―記念館、教育、観光」というタイトルです。登壇者は日本、アメリカ、オーストラリア、それぞれの平和記念館や戦争記念館、戦争博物館などに関わっておられる方々にお願いし、今回の論集にも寄稿してもらってる李榮眞（イ・ヨンジン）さんという韓国の文化人類学者と、長崎国際大学の宗教学者で観光学にも造詣の深い木村

勝彦先生にコメンテーターをお務めいただきました。李さんの研究は、朝鮮人特攻兵そのものの歴史を解明するということではなく、それが今、特に鹿児島の知覧や加世田において、学校の先生たちや生徒といったようなグループの平和活動の中でどう捉えられているのかを、現在進行形の問題としてフォーカスを当てています。

あと、3年目のシンポジウムを終えてすぐ翌月から、幸いにフルブライトの奨学金をいただいたので、ハワイ大学に行きました。その前後から、ハワイ大所属の先生ともやりとりをしていました。例えば、そこの大学院出身でUCLAアジア系アメリカン学科の教員であるグアム人研究者のキース・L.カマチョの博士論文を刊行した *Cultures of Commemoration: The Politics of War, Memory, and History in the Mariana Islands* (University of Hawai'i Press, 2011) を当時、指導していた院生と演習で読みまして、翻訳の出版に何とかこぎ着けました（キース・L.カマチョ『戦禍を記念する―グアム・サイパンの歴史と記憶』西村明・町泰樹訳、岩波書店、2016年)。原題を直訳すると、「記念の諸文化」となりますが、日米や、グアム・サイパン・テニアンといったマリアナ諸島のチャモロの人たち、それ以外の人たちも含めたさまざまな、記念、記憶のアクター（担い手）たちの相互交渉の歴史を描いています。

原爆を搭載して広島、長崎に飛び立った空港がテニアン島にあります。配布資料に地図を付けております。テニアンという場所は、東京からずっと下りていくと伊豆諸島があり、小笠原諸島があって、そのさらに南に位置します。マリアナ諸島でグアム、サイパンは有名なので皆さんご存じだと思いますけども、サイパンのすぐ脇にある小さい島がテニアンです。このテニアン島の人々にとっての原爆の問題についても、この本の中で取り上げられています。タオタオ・イ・レドンドという地元の平和活動グループについて紹介をしています。これについては5年前になりますけども、『戦争社会学研究』1号で空襲をテーマにしたテーマセッションを行って、そのコメンテーターとして「空襲の記憶とポスト戦後」という文章を書きました。今回、先ほどのスライドと一緒に資料として配布していただいていますので、こちらについて話をしていきながら、このテニアン島の話につなげたいと思います。

今回、記憶と記録の研究集会にお呼びいただいて、あらためて自分が5年前に書いた文章を読みつつ、非常に関連している部分が多いということを実感しました。とりわけ継承ということをめぐって、さまざまな視点から、継承の困難の中でいかに継承できるのか否かということを書いた短い文章ですので、時間のあるときにお読みいただければと思います。

空襲の間接的記憶というテーマについて、書いています。その部分で、今お話ししたテニアン島の話に触れています。151ページの上の段をご覧ください。2006年にテニアンを訪問しました。その前年に、いわゆる天皇皇后のサイパン訪問があったん

ですね。当時、関わっていた国立歴史民俗博物館の共同研究の一環で行くことができました。このプロジェクトも戦争体験の語りと記録に関する研究でした。テニアンに行ったとき、長崎県民としてはぜひ原爆搭載地も見ておきたいということで訪問しました。全国の空襲被災都市のB-29をはじめとした戦闘機も、やはりそこから飛んでいたりします。

もう一つ、今回、時間があれば紹介したかった事例があります。ちょうど、今の上の段の真ん中の所に出てきます。長崎にお住まいの金谷安夫さんという方に翌2007年に会ってインタビューしました。この方はテニアン島の戦争体験について、自費出版で『戦塵の日々』という手記を書かれています。サブタイトルが「原爆の基地、テニアン島の戦闘と遺骨収集」ということで、私が2006～2007年頃に、戦地に遺骨収集に行ったり、戦地慰霊をする人たちに関心を持って調べる中で出遭いました。鹿児島のご出身ですが、戦前は三菱長崎造船所のエンジン技師としてお勤めで、その後、戦地テニアン島に出征をして、命からがら生き残って、長崎に帰って来られたという方です。

これについて、非常に興味深い話があります。8月９日の平和祈念式典に際してのエピソードです。今は長崎駅からはなかなか見えなくなってしまったんですけども、福済寺という、崇福寺や興福寺と並ぶ中国系のお寺がありますが、亀の背中に観音像が乗っている長崎観音があるところです。これはもともと原爆で同寺の大雄宝殿、いわゆる本堂が吹き飛ばされた後に戦後に再建されたものです。その建立にも金谷さんが、実は関わっているんですね。当時の住職の三浦義光さんがフィリピン戦の生き残りだったということで、どうも親密な関係を持たれていたようです。金谷さんは、8ミリカメラを持って何度も遺骨収集に行って、その映像を撮ってドキュメンタリーを作ったりしています。それを全部DVDに焼いたものをインタビュー時にいただいておりまして、授業やこういった機会にお見せすることも多いです。今日は時間の関係もありますので、それはスキップさせていただきます。

次の152ページをご覧ください。ペンを引いた所を中心にいくつか拾い読みをしていきます。PDFのマーカーを引いているところを読みます。まず、上の段ですね。キース・L.カマチョが『戦禍を記念する』において記述した、テニアンにおける平和運動団体、タオタオ・イ・レドンドの事例を紹介していきたいということで書き起こしています。この組織は映像制作やワークショップ、平和集会を通して戦争を考えている平和運動団体である。下の段にいきます。1990年代の初め、太平洋戦争の終結を祝賀するために、グアムやサイパンやテニアン、解放記念日の式典をやっていました。しかし、その解放記念日のあり方も考え直そうということで動きます。オルタナティブな式典を企画するということで、このグループが選んだ場所が先ほどご紹介した原

爆搭載の場所、ノース・フィールドと呼ばれる戦時期には日本軍の滑走路で戦後には米軍が接収して、今はその一部が軍事用に使われているところです。この原爆搭載のピットの場所が展示施設になっていますが、そこで実施しようということで軍に許可を申請しました。軍としてはちょうどスミソニアン博物館のエノラ・ゲイ展示をめぐってぎくしゃくしていた時で、事なかれ主義の姿勢なんですね。許可を出さなかったと。

そのページの最後、主催者の声を紹介しています。彼らが提案した式典のポイントというのは、対立を和らげ、この記念日に多様な信念を持つ人々に対し、厳粛で敬意に満ちた雰囲気の下で共に集う機会を提供することであると。考えの相違を感じる機会ということが癒しのプロセスに不可欠であるという理念のもとに始まっていることが分かります。とりわけこのテニアンの人々にとって原爆搭載地という意味の重さ、大きさについて触れられています。153ページの上の段の後半ですね。世界に向けて、広島や長崎を破壊した原子爆弾の飛び立った島の出身で、伝えることは本当に不幸せなことであります。しかしそれが史実なのですと。下に飛びます。このように、空襲・空爆の直接的被害者とも加害者とも言えない。自分たちの島から原爆搭載機が飛び、そうした事実にいや応なく巻き込まれたテニアン島の先住民チャモロの人の記憶とその継承ですね。それでも国際政治上は、それが無視されて日米の問題として国家間関係が語られます。しかし、そこにはさまざまな記憶の担い手が実際にはいるということですね。これ、空襲の被害を考える際にも、そうした第三者と言えない非常に複雑な立場性を帯びた人々から、むしろ自分たちを捉え返すことの必要性が見えてきます。

4．継承の３つの回路

154ページにある「2　記憶への逆風と回帰の経路」という見出しについて、この逆風という言葉、これは要は忘却の圧力にさらされているということですね。記憶をしようという、それが忘却にあらがって逆風にさらされながら、何とかそれを残そうとしていることを表現しています。しかし、いわゆる継承の問題、記憶の持続継承の問題ということには、いくつかの経路があるんではないかということをここで紹介しています。今の段の一番最後の箇所では、「日常から失われてしまった過去へはどのようにしたら辿れるのだろうか。戦後から現在に至る記憶の取り組みに学ぶとすれば、それは一様ではなく、複数の経路が存在しているということがうかがえる」というふうに書いています。

１つには、私自身が研究してきた慰霊追悼といった儀礼的な対応があります。これについては、今日はスキップしたいと思いますので、後でご覧いただければと思います。

２つ目としては、155ページの上の段に2行、マーカーを付けていますけども、記

憶の伝承、記録化に向けた市民的努力ということがあるのではないかと考えます。これは、こちらのセンターの今年の研究テーマにつながるのではないかと思います。

今日紹介したいのは、むしろこの３つ目です。155ページの下の段に、第三の経路として、「不意に回帰する状況に埋め込まれた出来事の断片」とあります。ちょっと冗長な表現ですが、日常の中にそれとして輪郭をおびない形で不意に回帰するものです。これにも注目してはいかがかということを述べています。

続けて、マーカーを引いてる所を、読みたいと思います。「定型的・組織的な先の２つの経路に比べれば、あまりにもおぼろげなものでありながら、しかし、日常においては忘却の彼方に置かれる空襲であったり原爆であったりの記憶へと辿り着く筋道を、既に70年以上が過ぎたポスト戦後的な現在の視点からとらえる上では一考に値する」と私は考えました。

では､この「不意に回帰する状況に埋め込まれた出来事の断片」とは何でしょうか。それを考えるヒントを、11月のシンポに登壇される青来有一さんが書かれています。ご著書『爆心』の文庫本の解説だったと記憶していますが、陣野俊史さんのインタビューに答える形で､「爆心地小説」について語っている部分があります。156ページの引用の途中から確認しておきます。最初の行､「土地の歴史として記録には残りはしても、住んで暮らしている人々は変わり、人々は被爆の体験もなく、意識も変わり、そこでなにが起きたかなどは特に考えもしないで暮らしている人々がほとんどではないでしょうか。それぞれの土地とは無縁だった人々の意識の奥底に、その土地の記憶がぽっとよみがえってくる瞬間があるのではないかと思います。」これを読んで、なるほどと思いました。『爆心』の登場人物たちが語ったり、ふと想起する原爆にまつわる記憶の断片というのは、日常生活の中、家族とか友人の人間関係であるとか出会いであったり、日常的な出来事の数々の間に特に主題化された形ではっきりした輪郭を帯びて話題に挙がるわけではないんだけども、話の端々にそういったことが出てきたと。それは、浦上キリシタンの先祖の記憶や伝承であったりということと同じなんですね。それと同じように、日常光景の中に断片的に埋め込まれた形で出てくるということです。

これが不意に回帰するものとして、私が注目して見たものです。156ページの下の段で、こうした記憶の断片というのはどう理解すればいいのかということで、一つの理解を述べています。宗教学では､宗教という目に見えない世界に何とか迫るために､メタファーやアナロジーを多用します。

ここで私がこういうふうに理解すればいいかなと思ったのは、一つのモデルとしては3Dパズルです。これはカラフルな点（ドット）がいっぱいあって、ちょっと焦点をずらしたりすると、何か動物の輪郭などが浮かび上がってきたり、文字が見えたり

するようなものです。しかし、ちょっと油断して焦点をずらしてしまうと、また見えなくなる。そういったことじゃないかなと。要は、視野に入ってはきているんだけども、それとして主題化されてない形で日常の中に埋め込まれている。あるとき、それがふとピントが合ってしまうことがあるんだと。そうしたことを青来さんはこの言葉を通して、爆心地文学をめぐるここでの引用を通して紹介しようとしているんではないかと理解しました。

こうした不意に到来する記憶というのは、なかなか捉えづらいものですが、しかし、これまでの関連分野の研究を見てみると、そうしたことが主題化されて取り上げられているものもあるんだということで、最後の段落で手短に言及しています。１つは「トラウマの研究」。いわゆるフラッシュバックという形で、日常生活の中にふいに侵入してくる非常に過酷な体験の記憶というもの。それが心身に支障を来すということで、研究の対象になってきました。今回の『戦争と社会』のシリーズでは、私の担当巻で、沖縄戦をめぐる戦後の取り組みとして北村毅さんにこのトラウマ問題を取り上げていただきました。

あともう１つ、これは新里先生の研究にも関わってきますが、シャーマン的な再現前化ということについても、とりわけ宗教学的には注目したいと思うものです。意識が変わる、意識の変性（トランス）という言い方をしますが、そういう3Dパズルのピントをずらすような形で、日常の状況とは脈絡がない形で、ある種あえて死者の声を聞くということですね。日常的な意識では見えないものに意識を向けるような、そういう在り方があって、これはシャーマンに限らず私的な形であったりさまざまな形で歴史的な事件が起こった場所に、詩人や歌人や俳人が訪れて、そこで歌を詠むというような、そうしたことも類似の実践として捉え直すことができるかなと思います。こういう形で記憶・想起を行う上で、物とか場所がないと、そうした営みを媒介するものが完全に消えてしまうということにもなろうかと思います。

５．架橋モデル

今回、いろいろ盛り込み過ぎてしまい、用意したお話を紹介しきれませんが、最後に橋の話をしたいと思いスライドを入れてあります。先ほどの金谷安夫さんの体験をめぐって、トラウマ研究の論集（田中雅一・松嶋健編『トラウマ研究１　トラウマを生きる』、京都大学学術出版会、2018年）で、この架橋のことを論じました（「トラウマから架橋へ―玉砕戦生還者の記憶がひらく新たな回路」）。金谷さん自身が自分の過酷な体験に迫るために先ほど紹介したドキュメンタリーを撮るんですね。面白いのが、金谷さん自身が撮影しているのではなくて、金谷さんが、恐らく最初は息子さんだろうと思うのですが、別の人に撮らせて自分は被写体になっている。崖の上から降

りてくるシーンを撮影したり、ナレーションについても一人称で語られるのですが、クレジットを見ると金谷さんとは別の人にナレーションを担当させています。自分の体験をそういう形で少し距離を取りつつ接近していくというのが、このドキュメンタリー作品の特徴となっています。それを見て、宮地尚子さんが提出した「環状島」というモデルを援用して説明できないかと考えました。トラウマ的な体験に自分が飲み込まれない形で接近するため、金谷さんのやっているこうした表現活動というのは、ドーナツ状の島の尾根を繋ぐようなかっこうでつり橋を架けるようなイメージで捉え返すことができるだろうということで架橋モデルということを考えました。

それによって、金谷さん本人だけの営みではなくて、彼を取り巻く関係も捉えられると考えました。私が、最初に金谷さんにアプローチしたのは金谷さん作成のホームページからでした。金谷さんは1920年生まれで、2007年にお会いした時には87歳になっていました。そういうご高齢の方がホームページを持っているわけないと思いながら、「メールください」というフォームに連絡してみました。「こういうこと研究していますのでぜひお話聞かせてください」と鹿児島からメールをしたら、「いいよ、おいで。チャンポンでも食べながら話しましょう」とすぐにお返事いただいて、長崎市内のお宅をお訪ねしたことがあります。私自身は研究上の関心でアプローチしましたが、それ以外にもテニアンやサイパンをレジャーで訪れた若者たちが、帰国後にもっとその島について知りたいと検索をして、金谷さんのホームページにたどり着く。そういうことがかなりあったようです。そして、あらためて島でそうした戦争の歴史に向き合う機会を得る。つまり、最初は金谷さん自身のために、島での記憶に距離を保って接近するために橋を架けるわけですが、その橋を尾根伝いに架けたことによって、尾根の向こう側からもその記憶に接近する回路を用意して、そこを若者たちが通ってきたということが言えるのではないかと考えました。

そういったことも後半では少しお話ししたいなと思ってスライドを用意した次第です。関心いただける方はスライド番号13に、論文名を出しています。最後、少し急ぎ足で脈絡のないお話になりましたが、そうした橋を架けるというモデルであったり、青来有一さんの爆心地文学の話であったり、他者の記憶にたまたま出遭うというあり方について、もう少し主題的に考えてみたいということで、お話させていただきました。

ご清聴どうもありがとうございました。